

ニセコに学ぶ 持続可能性の本質



ブルース・マンロー氏による「Mountain Lights 光が紡ぐ未来への祈り」。
10月10日までニセコHanazonoリゾートで開催中

北海道のニセコでは、今年の夏期、とてつもないスケールの光の芸術「マウンテンライツ」が設置されています。ニセコHANAZONOリゾートに、1.3kmにわたり輝く光の帯が連なります。一つ一つの光は、光ファイバーを使用したアートワーク「ファイアフライ」です。ゆらゆら揺れる線香花火のようにも蛍のようにも見えます。これが合計18万個も連なり、ニセコアンヌプリの山の裾野に「活火山からマグマが流れるような」軌跡を描き出しているのです。観客はゴンドラでこのインスタレーション

の最上部まで昇り、光の軌跡に沿って歩いて下りてきます。揺れる光の中で歩くと、不思議なことに、心が静まり、隣の人と語る声がだんだん小さくなり、より内的な話題に移っていくのですね。スペクタクルな屋外インスタレーションであると同時に、人々の意識に働き掛けるアートでもある「マウンテンライツ」を作ったのは、光のアーティストであるイギリス人、ブルース・マンロー氏です。世界各地で光のインスタレーションを展開しており、今回、日本での初開催にニセコの地を

選びました。

マンロー氏は、光は火の現代的な形だと語ります。誰かと火を囲むことで、ぬくもりや安らぎが増幅し、共感を覚えやすくなります。焚き火がまさにそうですね。誰かと共感し合うという人類共通の経験や感情を、光のアートを通して呼び起こしたいという願いが「マウンテンライツ」に込められています。

ニセコを選んだマンロー氏は慧眼で、この町は人口約5千人の小さな町ですが、転入者が多い町でもあります。転入者の多くは、まずは留学や旅行に訪れ、何度も来るうちに町が好きになり、ついには住んでしまうそうです。

医療や教育が充実していたり、外国人も違和感なく住める多様性があったりということが移住の理由とされていますが、町役場に行き、副町長さんをはじめ役場の方々にお話を聞いて腑に落ちたのは、この町にはほぼ理想的な民主主義が根付いているということでした。ニセコの「まちづくり基本条例」は、町民が「育てていく条例」として位置付けられており、罰則もありません。あらゆる場面で「話し合いで決める」ことが前提となっています。「いまだ

なかのかおり



1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修士。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「「イノベーター」で読むアパレル全史」（日本実業出版社）、ほか多数。最新刊は共著『新・ラグジュアリー 文化が生み出す経済100の講義』（クロスメディア・パブリッシング）。

に5回目の話し合いをしているところもありますが、それが民主主義のコストというのだと思います」と副町長は語ります。

「言つてもしょうがない」という絶望感が皆無どころか、二人一人が尊重され、議論が自由に交わされているのです。世界中からアーティストを含む多くの人を惹きつけるニセコの根本的な魅力は、町の政治にありました。

ニセコは政府から環境モデル都市やSDGs未来都市に選定されています。環境を不変のまま保全していくのではなく、環境と住民（自分）が柔軟につながり続けていくこと、そこにこそ持続可能性の本質があることを学ばせていただきました。

アートが生む共感の環が壮大なスケールで広がっていく光景に、地域住民と環境との共感の連鎖を重ねる思いがしました。